



使徒の働き 1:-28:

聖霊(教会)の国		2017.8.9											
使徒行伝		聖霊	教会	ユダヤ人	異邦人	心	口	信仰	律法	証言	神の国	こぼ	
新しいのち(復活)	7:-9:31 官. エリサレム 聖霊降臨(25人) +ステパノ. +パウロ(復活)	22	6	3	5	7	24	16	12	2	10	2	19
新かた(復活)	9:32-12: エリサレムから散らされる 異邦人に聖霊 アンテオケでキリスト人(25人+異邦人)	7	4	-	6	5	38	3	6	-	4	-	7
新かた(復活)	13:-19:20 宣教師の作 アンテオケから諸教会 (パウロ: パテスマ受. 聖言. 12人)	9	9	14	31	18	1	68	28	6	5	2	29
新かた(復活)	19:21-28: ローマに行く エリサレムと証言 ローマでも証言 (18人+パウロが証言した人達+2教会と3人. (25人→キリスト人)	4	5	3	37	14	-	110	9	11	10	2	9

使徒行伝全体で、教会はキリストのからだである、キリストのからだはユダヤ人だけではなくて全世界の信じる者たちの集まりであるということは、ローマ人への手紙の最初で言われていますね。信仰の従順をあらゆる国の人々にもたらすためにということです。

4つの段落に分けています(1:-9:31、9:32-12:、13:-19:20、19:21-28:)

新しいのちが生まれる。御霊によって生まれる。ユダヤ人達に生まれる。ユダヤ人達に与えられる。ステパノのが復活したのがパウロみたいな感じですね。パウロが聖霊のバプテスマを受けるところでこの9章が終わります。(1:-9:31)

その新しいのちを受けた人達は、実は異邦人にもその御霊が注がれますので、ユダヤ人も異邦人もひとつになって、新しいからだである教会が作り上げられました。(9:32-12:)

このからだは全世界に広がっていきます。(13:-19:20) 全世界に広がっていった教会は、全世界の中心のローマで、ユダヤ人、旧約聖書のモーセの律法と預言者に言われていたイスラエルの民、それが目的としていた神の国、それは信じる者たちの集まりである教会というものが正当な継承者であるということを証言して、それが認められているというのが、この19章からのところです。(19:21-28:)

特に最初のところに御霊が多いです。3番目の段落が興味深いですけども、教会とユダヤ人の会堂で戦っている感じですね。ユダヤ人と異邦人。ユダヤ人と異邦人というのは、13章以降にずっと問題になっています。このユダヤ人と異邦人が集まっているキリストの教会に対して、ユダヤ人たちが反対するということです。13章から19章のところに、信仰の戦いだ、信じることだ、その言葉を信じることだということがずっと強調されて、それで最後に結論ということで、復活の力が教会においてこそ現れているという段落になります。

19章の終わりのところに、バプテスマのヨハネのバプテスマしか知らないアポロが、エペソに来て教えている。そこにローマから追い出されたアクラとプリスキラが来て、キリストのことを教えて、聖霊のバプテスマについて教えると、今度このアポロは、コリントに行きます。そこにいなくなった後にパウロが来て、聖霊のバプテスマについてエペソに教えて、救いに導かれる。12人の人が異言を語ってというように、また最初の話に戻ってまいりますよね。この辺に書いてあるのを見ると、ユダヤ人と異邦人だけじゃなくて、バプテスマのヨハネの洗礼を信じた人たちもちゃんと救われてこの教会に入れられているということが書いてあるのも興味深いですね。古くからいた信仰者も聖霊のバプテスマを信じるように変わるというようなところも21章にあります。

その信じる人達は一人も漏れることなく、いろんなタイプがいるということですね。バプテスマのヨハネの説教を信じて悔い改めた人ももちろん入っているし、散らされていたユダヤ人達も戻ってきてるし、散らされた中の一番の散らされた民であるベニヤミン族からパウロは出てくるし、異邦人もギリシャ人もいるし、ギリシャ語を話すユダヤ人達もたくさんこの中に入っています。そういう人達がいないと異邦人に話すことはできないから、バルナバとかパウロが活躍するのは、そういう理由もありますよね。アフリカからも来るしということで、全世界に福音が伝えられて、キリストの教会が作り上げられていったということが、使徒行伝のテーマになっていると思います。